

佐賀藩六府方

池田史郎

1. 六府方の概念

六府方の六府とは尚書に「水火土金木穀これを六府と謂う」^①とあることから名付けられたものである。佐賀藩にあっては六府方という役所は8代藩主鍋島治茂治下の天明3年(1783)末に設けられたのである。「六府方被相立候御主意之大概^②」によると

十二月於御側六府方役所被相立候付、左之役々一役所ニ被相寄とある。そして皿御山方・御山方・搦方・大河御陶器方・御牧方の5役所をあげ、さらに

右役々六府方一般之受持相成候付、是迄相勤罷在候役人之儀者、被相省格段^{はぶみかれ}左之人数六府方役被仰付候

とある。これによると当時一般に行なわれた行政整理の一つと思われる。『鍋島直正公伝』^③には「六府方は御側、すなわち勝手方に属する事業にて偶然にも其役所は六個より成り立てり」として山方・里山方・牧方陶器方・搦方・貸付方・講方をあげているが、少なくとも天明3年末当初には山方と里山方は別箇のものであり、講方や貸付方はまだ設けられていなかった。前掲「六府方被相立候御主意之大概」に

右之通り六府方吟味之趣筋々御達相成候末、重疊御評議之上、米筭四万石御家中下々迄、石割を以御貸付可相成旨被達御聴其通被 仰出候得共、年内ハ無余日不間合候付、先以御親類御家老中へ米筭壱万石御貸付相成、残三万石ハ翌寛政七卯春御三家始御家中下々迄御貸付相成候ニ付、於六府方御貸方役所被相立、年壱割之御益付三拾年賦ニメ拝許被差出(後略)

とあって御貸付方は寛政7年(1795)に設置されたと思われるが、講方も恐らし千人講が万人講にかわり、六府方の管理下に移った寛政初期頃ではないかと思われる。『鍋島直正公伝』^④によってその職務内容をあげると

山方は総ての山岡谿谷を掌り、里山は林野、隄塘、河渠、沼沢、海岸、潟鹵

等にて田籍に上らざる土地を管轄し、城下の邸地町地などもみな其支配に属す。堀方は元来佐嘉湾海の潮汐は高度にして海浜に淤泥^{おでん}を打寄するが故に其処に材を打ち柵^{から}を堀みて淤泥をして自然に推積せしむる。これを堀と称す。堀方は此役を掌るもの、泥濘を開築して新地となす職任なり。大河内陶器方は伊万里御大河内に幕府進献の陶器製作所を創め、以て精良な器を製せしめて秘密の工技を伝えしめたり

とある。なお、天明3年に於ける六府方付役は長尾矢治馬、向井五兵衛、三好五右衛門、役内目付は浜野源太夫、早田卯右衛門であった。^⑤

2. 六府方設立の背景

六府方設置の理由として前掲「六府方被相立候御主意之大概」に
(前略) 御相続篇之義御先代以来毎々御有米を以御遣合之御仕与有之儀^{しくみ}候得共、元来御蔵入御取納高寡、御不足相立候付、御家中御馳走米(献米)被相増、或大坂其外非常之御借銀等を以被相償より外之御計策無之
とあるように藩の税収の不足があげられる。この藩税収減少の背景としては天災疫病の頻発と農業労働力の不足と支藩への財政補足が考えられる。

『佐賀県災異志』によると、安永2年4月には雨が降り続いて苗が腐れ、麦作にも被害が少なくなり、翌3年の春から夏にかけては旱天が続き、同5年5月、7月に大雨洪水があり、3000町ほどの田畑が水下、あるいは砂下となり、翌6年から8年にかけては7月、8月に雨が降り続いた。天明元年(1781)同5年には6月に早ばつ、同3年7月には大風雨のあと天候不順で冷気がつづき、20万石以上の損毛となった。安永9年の7、8月には疫病が流行し、疫病転除の御祈禱が徳善社、本庄宮で举行され、御匙医(藩の抱え医師)の郷村派遣が企画された。こうして自作農流民化の傾向が生じ、天明3年10月には領中の乞食、非人どもに年行司の発行する提札をもって徘徊することが命ぜられ、彼等が徘徊を止めたり、死亡した場合は大庄屋に命じて徘徊札を返納させている。虚無僧に対しても寺社方で調査させ、年行司発行の提札の携行を命じている。^⑥

農村奉公人―荒子―の不足が労賃を高め、農民に与えた損害も大であった。

『明和改正記録』に所収する「鳥ノ子御帳御掟書書拔」に

中間荒子扶持方、上者粗六石其外は挨拶次第たるべし、自由之時者師走十三日限たるべき事

只今ニ而者荒子之恩扶過分ニ相成、御本条之員数ニ一倍ニも相成居は御仕組段々行届申候ニ随而御書載之通ニ可罷成候事

とあって荒子の恩銀が藩政初期に比して倍増していることがうかがわれる。安永6年頃になると

近年（中略）諸鄉村荒使子儀、至而風俗悪敷、高恩を取り、万事少之事ニ而も、ゆすりを懸、作方肝要之時分、病氣杯ニ事寄、隙を欠、或ハ半途ニ逃帰り、恩銀取納越等有之候而も急ニ返済不仕、右体之事ニ而、及潰候百姓間々有之由相聞、以之外儀候^⑧

とあり、天明3年ごろにも「累年身売之者、風俗悪敷者」が所々に契約して恩銀を詐取るものがあった。^⑨

このような農業労働者の横暴によって農民は打撃を蒙り、農業生産は低下の一途を辿ったのである。また、支藩やその他の配分地への財政補助も少なからずあった。安永3年（1774）小城藩に課せられた有栖川宮織仁親王の御馳走役に対して、小城藩としては本藩にその費用の借用を願い出たが、本藩はこれを許さなかったので、幕府に直接7000両の拝借を願った。このことによって小城藩はもとより本藩を初め他の2支藩（蓮池藩・鹿島藩）までも「差控」または「御目見遠慮」の処罰をうけた。これにより本藩は小城藩に4000両の補助を与えている。^⑩

さらにまた、同6年4月に蓮池藩が「防御役」（江戸市内の警備）を勤め、「過分之物入」があり、「其上去夏私領中損毛彼是」があって「役儀」を相調えることができないというので金1000両の合力を願ったとき30貫の補助を与えているし、^⑪ 翌7年7月にもさらに金500両を追加補助している。^⑫

さらに天明2年（1782）同支藩が公家衆御馳走役を命じられたときにも78貫の合力を行なっている。^⑬

配分地に対しても同様に、鍋島主水の知行所が不作であったというので安永8年(1779)60石、天明元年(1781)273石7斗2升の補助を与えている¹⁸。

こうして藩財政は逼迫した。安永末年になると大坂上米が1万石不足し、大坂銀方から訴えられ、大坂町奉行の取りさばきをうけ、相続方相談役の坂部次郎左衛門、深堀新左衛門などの5名は「年越」を調えることができず「言語道断之行詰」で「御繰合之手段」が全くないという理由を以て役方の辞退を申し出ている。¹⁹

参勤行列や在府中の騎馬御供などの人数も減少し「御供上下御道中を始、江戸表」でも綿服の着用を励行し、幕閣への付け届も辞退し、参勤途中において本陣そのほかからの進上物もこれに対するお返しを省く(節約)するという理由で辞退している。²⁰そして安永9年(1780)3月の「御親類御家老中へ被仰出候御書付」の一節には²¹

家中切米渡方之儀我等よりも毎々申聞候処、干今不相渡由以之外不行届儀ニ而(後略)

また

市中郷村之者年来困窮之末、猶又及極難由承之、不便之儀共ニ而、是以先納其外相懸候故と存候(後略)

とあり、家中切米の未支給や年貢の先納までが行なわれたのである。かくて支藩への補助も減らされている。同年、鹿島藩主直宣が在府中御門番を勤めたが従来は家中飯米120人分、勤めのない場合は90人分補助していたのを、その年からそれぞれ20人分ずつ減少している。²²

また安永9年から7カ年間賦課されていた御馳走米も天明3年にいたって家中年来困窮の故を以て部高(賦課率)を引き下げようと吟味したが、

江戸上方并御国長崎日田新古御借銀却而者莫大之銀高ニ而口々取鎮未行届、且幾々御不勝手之筋者有無御仕切内相預付候通無之而不相叶儀候、^{たとい}縦、唯今部高少々相減候ても左^さ而己御家中之潤^{のみ}ニも相成間敷候

というので御馳走米は「去年畢^{いつきよう}竟」、^{たとい}「御親類家老千石以上迄勤者四部(4割)、休息ハ五部(5割)」の御馳走米を課することになったのである。²³

3. 六府方の設置と長尾矢治馬

こうして、八代藩主鍋島治茂は

重畳被遊 御賢慮候処、木火土金水穀之六府全相備御国用不乏通無之而ハ御
永続之基本難相立候条、御内外之役々相守其旨、新地開発諸産物繁育之仕組
厳密遂讃談可相勤旨被仰出候

と藩財政難克服の積極政策として六府方を設けて新田開発をはじめとする殖産
興業を実施するのである。搦^{からみ}(干拓)による新田開発は安永7年(1778)7月、
長尾矢治馬(東郭)が献策したものである。長尾矢治馬は儒者で治茂の側用人
である。「文化二年着到」によると、彼は鍋島帯刀組に属する切米55石、内加
米10石の中級武士である。長尾東郭の献言は次のようであった。

近年臨時費が打ち重なって、公刃其外莫大の御入方で何分にも省略しにくく
年々過分の御不足がある。このままでは御相続筋(藩財政維持のもくろみ)
がたたないので、与賀・川副・嘉瀬・白石筋の潮の外濶一通り皆以て搦を築
き立てたい。これは大事業であるので御家老1人を専任させ10カ年計画で万
端相任せ、一般行政とは切り離して粉骨差^{はま}し部^{はま}らせたなら、6000町の新田を拓
き約3万石の御物成(税収)の増加となる。その仕組(企画)は次の通りで
ある。^⑨

- 一. 寺社方が主催している万人講を搦先(干拓係)につけ、竹木・郷物その
ほか、係役人の役料や飯米を一切整え、御本方(御蔵方)の銀米を費消し
ないようにする。
- 一. 新搦の儀は専ら国益になることであるから、夫丸(人夫)・郷物・郷の
貫立銀を以て御築き立てになつては郷内の衰微に相成り、却って莫大の害
に相成るので夫丸・郷物は一切差し出さないようにする。もっとも沙留等
の節、過分に人夫入用の節は耕作の手透^{てすき}を相考え、賃金を以て雇い入れ、
郷物の儀は買い整えるようにする事
- 一. 築き立ての人夫や最初に作る者は成るだけ旅人を滞在させたい、そして
国内居住をさし免^{ゆる}して、本田を作る百姓が絶体に新田の方へ入りこまない

ようにきびしく取り締りをする。もっとも、人が多い在所で本田の障りに
ならない百姓は見計を以てたずさわるようにする事

- 一、新地を築き立てたものは佐賀領内、他頭の者の差別なく四部六部（4：
6）ないし七部三（7：3）に分配する。たとえば百姓が築き立てたもの
のうち70町は藩主にさしあげ、30町は其者に下付する。土地を広め人民を
集めた勲功を以て奨励のため土地の広狭に応じ、侍・手明鑑^{てあきやり}の格に仰せつ
け、そのほかは御歩行^{かち}・足輕にも召し成され、三部の地を御免許田の印と
とも給付されたい事
- 一、格外の儀（特別のこと）であるから牢人等仰せつけられた者でも築き立
ての出精次第、三部の御免許田を下される事
- 一、諸郷の切米取の給人は寺社家に限らず、築き立てた搦地を御切米の分だ
け地方（給地）で下さるように願ったものがある場合は、七部はその者の
御切米の分だけ渡し、三部は自余同然御免許田に仰せつけられる事
- 一、御家中上下寺社家にいたるまで知行取の面々でも築き立てたら自余同然
七部三部の築分を仰せつけられる事
- 一、祠堂につけたいと願った寺院の儀は築立次第、地方に於て差し出される
事

この企画に対して土地を広く築き立てた者を侍・手明鑑^{てあきやり}の格にすることは容
易でないので無条件には認めないこととし、「其節之趣」に随って幾重にも吟
味することにし、切米を地方にする道理はないので切米の代地を作らせる形に
して切米だけを搦地で渡すようにするといっている。そして「旅人滞在并ニ御
国住居」をゆるし、本田農民の移動を防止して、以て本田の荒廃を防ぎ、藩と干
拓実施者との搦地の配分を7対3にすることについては「何程に而も被差免、
指支候儀有之間敷候」と長尾の案が全面的にうけ入れられたのである。同年長
尾矢治馬は搦方附役を仰せつけられ、柳川そのほかの隣国に見聞のため派遣さ
れたのである。

4. 搦 方 と 講

六府方の中心機関である搦方（干拓局）の経費は前掲「六府方被相立候御主意之大概」に

右役内御遣料之儀里御山方之儀者御側^ろ被差出来、御陶器方御牧方ハ打追之通（從來の様に）御蔵方^ろ被相渡儀候得者、搦方御遣料之儀格段御蔵入^ろ難被差出ニ付、万人講之儀者、元来御上修理之寺社為修造用、依願被差免来候を、六府方御引請相成、東西、東者南光院（佐賀城下高木町^{あたご}の愛宕社）境内西ハ伊勢屋町太神宮境内式ヶ所ニ興行場被相定、御益銀之内、四部通者寺社為修造用、御相続方御取納相成、壹部通者救急料ニ被相備、五部通ハ諸搦築立用、扱又、諸物産仕立方其外六府方御遣料へ被相定候、惣而新搦築立付而者、郷夫差出候半ハ不相叶儀候得共、相定候郷夫之外臨時ニ出夫被相懸候而者、郷内可及難渋、万人講之儀者御領中万人之集材ニメ、万人之力を以、新地致開発候得者、又々、人民御救之道理ニも相当候御趣意を以、右之通被仰付候と記している。これによると里御山方・御山方の費用は御側すなわち御懸硯方から、御陶器方のそれは御蔵方から、そして搦方のそれは万人講の利益のうちから五部（5割）をあてることにした。一定の郷夫（郷内から集徴ある人夫）のほかに臨時に郷内から人夫は徴集しない。なお、この文の補注に

本文四部通者寺社修造用被相備候得共、諸寺社へ配当無之とあるので万人講の利益のほとんどは搦方にむけられたと思われる。万人講や千人講については『鍋島直正公伝』^⑨に

講は今の富札の類にて万人講、勸化講の名称あり、是より得たる利益を一つの財源にあて、以て用帑の困難を濟ひき。此の如き用度の補充は公（治茂の時代より始まりたりしなり

とある。「泰国院様御年譜地取」^⑩にも

（前略）御下国料并江戸御遣料大坂表調達不相調達不相調ニ付、仕送之儀、段々江戸より申来候得共、一向不相整候、然処御用達どもより千人講日闔^{くじ}被差免候ハバ、只今限百五十貫目先納仕、追々三カ年之内に者、千貫目相納可

申旨相願候、不容易儀候得共、外ニ調議之道無之、反的之御危急ニハ難被相替ニ付、吟味之上被差免候

とある。故に講は庶民を対象にして一定の日に開催される富くじで、それを寺社や御用商人の札元に開かせて、その利潤を寺社造営費や藩の特別税収の一部にあてたものである。『御物成并銀遺方下目安』によると別表のように安永8年からの千人講益銀があげられていて、天明8年(1788)を境に万人講益銀と交代している。万人講が搦方の管理下に移ったのは長尾矢治馬が搦方の設立を上申した安永7年と推察されることは佐賀郡大堂六所大明神修造用として宝暦年間に許可されていた万人講が安永7年に六府方にとりあげた例があげられるであろう。^⑧ 牛尾山別当坊(小城郡小城町三里池上)焼失後の修造のため許可されていた万人講も何時のころからか六府方に移されて、その代りに正銀30貫目が給されている。^⑨

次に問題となるのは搦方の費用が何故に講の益銀から支出されたかということである。

(前略)殊一旦築殊留候ても熟地ニ可相成哉も難計付而者、御借銀を以築立可有之様も無御座、尤、米価高直ニ付而少々売間(利潤)御余計者有之儀ニハ候得共、右者無扨御借銀口々御払込ニも相成、且当時郷村市中津内及飢渴候艱之者夥敷有之、右御救方ニも唯今まで過分之出方ニ而、此末猶又御手当無之而不相叶、当秋迄之間余程之儀と相見候、右ニ付而ハ搦築立迄之御手当不行届、自然其儘被差置候而者、所詮、何等ニ相成候ても御取箇相増御遣合之道相立候所ニ不参付、前断四百貫目位ニ而ハ全御成就可相成哉難計、大難を請候場所候得者、自然相崩候節ハ幾度も御普請無之而不相叶、大捻之御入方ニ而、中々手当行届間敷、夫とも其儘差置候而ハ最前之四百貫目空ク相成候通ニ而ハ熟地相成間敷、因茲遂吟味候ハ、千人講之儀明年中御猶予被成下候半者、右位者御益可有之、右を以、追々六府方へ相渡、全熟田ニ相成候通仕度候^⑩

これは千人講廃止に対する反対意見であるが、万人講が寺社から六府方に移された理由もここにあると思われる。すなわち、借銀を以てこれにあてるには干拓の場合は熟地となるのに相当の危険が予想されるし、さりとて、蔵方や勝手

方からの400貫目位の支出では不足するし、売米の利潤は貧窮者の救済に向けねばならない事情であったからである。

別 表

米筈御益銀・千人講御益銀・万人講御益銀

(「御物成並銀御遣方大目安」より作製)

年 号	米筈御益銀	千人講御益銀	万人講御益銀
安 永 8 (1779)	20貫976匁3分	554貫076匁8分	
〃 9 (1780)	96・455・0	678・177・1	
天明 1 (1781)	105・668・4	593・881・9	
〃 2 (1782)	96・308・5	608・588・8	
〃 3 (1783)	15・794・4	532・555・3	
〃 4 (1784)	5・311・5	270・747・8	
〃 5 (1785)	163・777・2	356・425・9	
〃 6 (1786)	132・250・1	407・943・2	
〃 7 (1787)	301・972・2	288・335・9	
〃 8 (1788)	163・000・0	79・746・7	1貫073匁5分
寛 政 1 (1789)	164・309・0		37・593・2
〃 2 (1790)	73・873・0		44・073・9
〃 3 (1791)	185・915・0		34・709・3
〃 4 (1792)	356・983・0		45・751・4
〃 5 (1793)	119・995・0		44・450・7
〃 6 (1794)	154・794・0		54・897・1
〃 7 (1795)	117・645・0		74・711・4
〃 8 (1796)	153・800・6		86・237・6
〃 9 (1797)	137・807・5		71・436・7
〃 10 (1798)	204・108・7		78・430・9
〃 11 (1799)	188・608・4		139・673・5
〃 12 (1800)	219・098・5		89・242・4
享 和 1 (1801)	130・824・6		78・768・6
〃 2 (1802)	135・819・1		103・554・2
〃 3 (1803)	189・698・1		97・768・4
文 化 1 (1804)	217・903・7		84・697・4

注・安永8年にはこのほかに増俵錢121貫404分、人別銀183貫439匁などの益銀があった。

5. 殖産事業の進展

六府方設立後3年の天明6年(1786)に於ては伊万里郷町裏の川筋の井手が近年新堀の築立てのため水が不足したというので新しく堤(溜池)の築造が許可されている。^⑨

同6年には同郷木須村の御山方管下の中尾でも4町の田地を開作するために作水用の新堤を築いている。^⑩ なお、新堀方役人、八谷善兵衛の指導で開作された伊万里川の川口で最大の新田—八谷堀—は前田善五左衛門ら20名の地元町人の資金援助をうけて天明5年に竣工しており、完成期に於ては八谷堀の物成は130石に達していた。^⑪

なお、伊万里郷に接する小城領山代郷にあっては塩田の造成も行なわれている。すなわち、寛政11年(1799)4月、坂田常右衛門は請役所(藩庁)に山代郷鳴石浦新堀について次のような願をだした。^⑫

つまり

(前略)築立被仰付、十ヶ年余相成、相応之塩焼立出来、至干後年候而ハ御国益之筋ニ可相成、最早人家も数軒相立居候処、諸触事其外取繕等難行届候条

という理由を以て

一村被相立、且焼立候塩売捌等ニ付而ハ諸色之品ニ交易仕義も有之候条、諸商売之儀も被差免被下度

と願って楠久新村と命名されている。

白石地区に於ては天明4年4月、御新地方が築き立てていた横辺田六角郷、中郷34町5反8畝12歩が六府方に引き渡されている。^⑬

同年12月には一向宗随喜のもの(信者)が寛永年間千栗土井の天建寺前に360間の土手を築いた経験を認められて、六府方新堀築立について加勢を申し出て許可をうけ、寛政4年(1792)願正寺の指揮の下に秀郷福富崎の新堀築立に3000人が労力を提供して褒賞されている。^⑭

なお、藩営秀郷福富崎の新堀は天明4年9月から着手され、^⑮ 同5年六府方

新搦地鎮護のため竜王社が建立され^㉔（現在福富町 六府方に現存する）、同年 8 月には役人小屋を建て、永池水道（永池堤より引いた用水）から水を引くため長さ1101間、幅 2 間の新水道を引いた。^㉕

元来、白石地方を貫流する六角川はいわゆる江湖で潮が高橋（武雄市朝日町）付近まで上昇し灌漑の用をなさないで、鍋島勝茂のとき成富兵庫茂安をして永池堤（北方町橋下）を築いて白石地方に水を引いていたものを更に延長したものであろう。^㉖

寛政 2 年（1790）2 月には福富村新搦が大半成就し、数軒の小尾が建てられ諸方より移住者があったので、福富新村という新村が誕生した。^㉗ このように開拓が進めが白石地方は益々用水に不足してきたので、同12年には焼米村（北方町焼米）に新堤の中谷堤（現在の焼米堤）を築いて回水し、横辺田両郷（現在の江北町・大町町）のためには中谷堤に接して水江谷堤を築いた。^㉘

以上は搦すなわち干拓を中心に考察したが、六府方成立前後から、植林についても奨励する所があった。天明元年（1781）七浦郷（鹿島市七浦）に出された植林の配分について次のような規定がある。^㉙

- 一、杉差立候者えハ四部通被下、六部通御用木相成候
- 一、松木仕立候者えハ畝数壺町ニ付、七反御用木相成、三段之立木者依願伐取被差免之
- 一、右之外、不依何色（どういう種類の木にかかわらず）仕立木、勝手次第植立不苦、尤、盛長之上、三部通者、依願伐取被差免之
- 一、壺ヶ村ニ壺ヶ所、竹山仕立候通申付置候、五六寸廻り盛長之上、畝数相改、三部通者請畔ニ仰付之

すなわち、植林の場合も搦地と同様、杉を除いては 7 : 3 の割合で藩と植林者で分配している。それでも濫伐の傾向があったので、六府方では寛政 9 年（1797）御山方役人を派遣して牛津以東の寺社頭23か所の検査を実施している。^㉚

菓草についても、天明初年に管理を御仕与所から御山方に移し、元町（佐賀市呉服元町）丸散屋藤右衛門に菓草の種を蒔かせ、これを取り木、実蒔によって増産を行なっている。^㉛

天明3年、白山町（佐賀市白山2丁目）武富順蔵の家伝薬を保護し、富山売薬を主とする旅薬（他国産の薬）の売買を禁止したのも国産の薬草の栽培を奨励ためであろう。^⑨ なお、牧畜業についても、天明7年秋、雌馬30頭を嬉野郷の兎鹿野などの御山方管下の百姓に飼養させ、一年に数10頭の子馬の増産計画を立てている。^⑩

6. 六府方の成果

寛政末年になると、干拓の成果があがり、御蔵入有田郷の村々より米6斗ずつ、白石4郷の村々より小俵34俵が初穂料として駄上されている。治茂治政下の干拓の総面積や収獲高は次のようである。^⑪

天明三卯年、文化元子年迄新堀出来立候所之秀郷福富新村遠江牛屋、諫早町西葉田浦、川副犬井道、伊万里早里崎、楠久鳴石浦其外凡成就相成候田畠、八十町五段六部余、凡地米六百七拾貳石四斗余、文化六己年御蔵方被相付候これは六府方が設置された天明3年（1783）から文化元年（1804）まで21年間の干拓の成果とみてよいであろう。安政3年（1856）「川副下郷・白石秀郷・田中郷・伊万里郷・六府方堀御物成目安」によると「地米七百九拾壹石壹斗九合」の干拓収獲高が記されている。

文化元年から安政3年までの52年間に118石余しか増えていない。両者を比較すれば、治茂治政下における干拓がいかに成果をあげたかがわかるであろう。「明治27年談話筆記」には「泰国民御代ニハ百貳拾万両ノ御貯蓄金コレアリ」とある。その拠る所の史料の明らかではないが、信じてよいものでないかと思われる。享和元年（1801）になると

大坂表之儀、古御借銀筋漸々相片付、年々京石五万石宛差登答之処、彼地之景氣ニ随、貳万石増上米有之、夫丈直段も相懸、御売米ニ相成候而も其時々米不引取候故、有米御蔵ニ積切不申、新御蔵をも被相建候得共、猶又、御取締手

堅相聞、御売米之内、年送ニも出方ニ相成候処、依風順、一同廻着仕以節ハ弥ヶ上御蔵積差支、外積又ハ御借蔵ニ積置、年分ニハ夫丈雑用相懸り、第一不用心ニ有之候、然処、彼地鹿島蔵屋敷引払、蔵元平野屋孫兵衛ヘ引渡相成筈候由（後略）^④

というように大坂町人からの借銀がかたづき、大坂への回米（上米）が従来5万石であったのが2万石増えて7万石になり、今までの本藩の蔵屋敷だけでは収蔵できないというので、支藩の鹿島藩の蔵屋敷を買収したのである。さらに3年後の文化元年（1804）には「有米御蔵ニ而ハ御差支候故」というので、30坪の大坂上福島にある中国筋（藩名不詳）の蔵屋敷を買収している。^⑤

一方、肥前米を^{たてまい}楯米（建米）にしようとする当藩の運動も効を奏し、享和2年10月

浜方請方宜、当秋買請之入札^ル此御方建米ニ相成候由、彼地（大坂）^ル申越候。^⑥

すなわち、肥前米は建米に選ばれたのである。大坂堂島の帳合米取引（空米取引ともいわれる一種の投機的米の取引）においては、1年を3回にわけて、各期間の売買の基準になる米を仲買各自が入札を以て月行事・年行事立会の下に定めた。これを建物米或は楯米（建米）と称した。第1期（夏建）のみは加賀米を当て、第2期及び第3期（冬建）は主として筑前・肥後・中国（防長）・広島^{ねい}の蔵米から選ばれた。^⑦ 大坂上米が建米になると「諸国廻米之基本之儀ニ而直位相進、専御国益之筋ニ付、」^⑧ 或は「御蔵米ハ勿論、御家中米其外御国米一統之直段ニも相響、就中、上米売捌等之弁利宜、御国益専要之筋ニ付」^⑨ というように、その藩の蔵米の価額が他藩のそれより騰貴して藩の収益増加となる。そこで、各藩は競って自藩の上米が楯米になるように運動した。佐賀藩の大坂回米が大坂堂島の米市場で享和2年秋に楯米に選ばれたのは佐賀米取扱いの浜方立入そのほかの大坂商人を通しての運動もさることながら、その根本要因としては「近年之 御登高之定石数無出入連続仕、御売方其外作法も有之」というように、当時の佐賀藩の大坂上米が長期間にわたって一定量が順調に回送されていたという実績が大坂の米商人たちの信用を得たものと思われる。それは

また、とりもなおさず、天明3年8代藩主鍋島治茂が長尾矢治馬の献策に基づき設置した六府方の中枢機関、搦方が行なった干拓事業の嚇々たる成果にほかならない。

註：①『鍋島直正公伝』第一篇

②「泰国院様御年譜地取」天明3年

③『鍋島直正公伝』第一篇

④『鍋島直正公伝』第一編

⑤「泰国院様御年譜地取」天明3年所収「六府方被相立候御主意之大概」

⑥同書天明3年12月1日

⑦同書安永6年3月日不知

⑧同書天明3年11月晦日

⑨同書安永3年3月9日、「蓮池藩請役所日記」安永3年3月1日、同年3月7日、同年3月19日、同月22日、同月晦日、同年4月6日

⑩「泰国院様御年譜地取」安永6年4月7日

⑪同書、安永7年7月17日

⑫「御物成並銀遣方目安」天明2年

⑬「御物成並銀遣方目安」安永8年、天明元年

⑭「泰国院様御年譜地取」安永9年1月

⑮同書、安永9年4月23日

⑯同書、安永9年6月6日

⑰同書、安永9年3月

⑱同書、安永9年12月27日

⑲同書、天明3年7月26日

⑳同書、天明3年「六府方被仰付候御主意之大概」

㉑『鍋島直正公伝』第一編

㉒「泰国院様御年譜地取」安永4年末3月日不知

㉓同書、天明7年月日不知

㉔同書、寛政2年12月29日

㉕同書、天明4年3月3日

㉖同書、天明3年2月10日

㉗同書、天明6年3月7日

㉘『伊万里市史』続篇

㉙「泰国院御年譜地取」寛政11年4月18日

㉚同書、天明4年4月3日

- ③①同書，天明 4 年12月26日，同寛政 4 年 5 月22日
- ③②同書，天明 4 年 9 月17日
- ③③同書，天明 5 年 7 月28日
- ③④同書，同年 8 月 4 日
- ③⑤『佐賀県干拓史』（乾）
- ③⑥「泰国院様御年譜地取」寛政 2 年 2 月 9 日
- ③⑦同書，寛政12年 7 月 8 日，同 7 月12日
- ③⑧同書，天明元年10月17日
- ③⑨同書，寛政 9 年 5 月22日
- ④⑩同書，天明元年 8 月 5 日，同 4 年 4 月22日
- ④⑪同書~ 天明 3 年 9 月18日
- ④⑫同書，天明 7 年 9 月20日
- ④⑬同書，天明 3 年「六府方被相立候御主意之大概」
- ④⑭同書，享和元年 5 月 1 日
- ④⑮同書，文化元年 6 月15日
- ④⑯同書，享和 2 年10月22日
- ④⑰『日本歴史辞典』宮本又次「建物米」
- ④⑱「泰国院様御年譜地取」享和 3 年閏正月12日
- ④⑲同書，享和 2 年10月22日
- ⑤⑩同書，享和 3 年閏正月12日

追記，「泰国院様御年譜地取」「御物成并御遣方大目安」などの史料はすべて佐賀県立図書館蔵の「鍋島文庫」におさめられている。